

小論文課題

支配と贈与

優生学と遺伝子操作が問題となるのは、それらが被贈与性に対する意志の、崇敬に対する統御の、見守りに対する形取りの一方的な勝利を宣言してしまうからこそである。しかし、こんなふうに思う人もいるかもしれない。なぜわれわれは、この勝利に思い悩まなければならないのか。なぜわれわれは、エンハンスメントに対する不安をまったくの迷信として斥けてはならないのか。仮にバイオテクノロジーがわれわれの被贈与性の感覚を打ち砕いたとして、それで何が失われてしまうのだろうか。

謙虚、責任、連帯

上の問いに対する回答は、宗教的観点からすれば明白である。すなわち、われわれの才能や能力は完全に自分自身のおこないに由来しているという信念は、天地創造の中での人間の立ち位置を誤解しており、人間の役目と神の役目を混同しているのだ、というわけである。だが、被贈与性を気になければならない理由は、宗教だけに求められるわけではない。ここでの道徳的問題は、世俗的な言葉で表現することもできる。もし遺伝学革命によって、人間の能力や偉業の被贈与的性格に対するわれわれの謝意が蝕まれていくなれば、われわれの道徳の輪郭を形作っている三つの主要な特徴、すなわち、謙虚、責任、連帯に、変容がもたらされると考えられるのである。

とかく支配と制御がもてはやされる世の中において、子育ては謙虚さを学ぶ格好の機会である。われわれは子どものことを深く気遣っているものの、われわれの望みどおりの性質を子どもが備えるように選ぶことはできない。この事実を通じて、親は招かれざるものへの寛大さを教えられるのである。そうした寛大さは、たんに家族の内部だけでなく、より広範な世界の中でも受け入れられてしかるべき性向である。それによってわれわれは、不測の事態を引き受け、不和を耐え忍び、制御への衝動を抑え込むことが可能となる。もし映画『ガタカ』のような世界が到来し、親が子どもの性別や遺伝的形質を決めることも当たり前になったとすれば、それは招かれざるものへの包容力を失った、ゲーテッドコミュニティ^(*)の拡大版のような世界になることだろう。

自己改善を目的とした遺伝子操作が当たり前になった場合でも、やはり謙虚さの社会的な基盤は掘り崩されていくことだろう。自らの才能や能力は完全には自分自身のおこないに由来していないという認識こそが、われわれが^{うぬぼ}自惚れへと陥る傾向を抑制するのである。もし「自ら創り出す人間」(self-made man)という神話が生物学によって現実化したとすれば、われわれの才能とは感謝すべき贈られものではなく、自らに責任のある偉業にほかならない、とわれわれは考えるようになるだろう(むろん、遺伝子^{エンハンスメント}増強を通じて生み出された子どもでも、自らの性質にかんして自分に責任があるというよりは、相変わらず感謝しなければならないことになるだろう。もっとも、その感謝する相手は、自然や偶然や神よりもむしろ親になるだろう)。

(*) 訳注 ゲーテッドコミュニティ 防犯性を向上させるために、周囲を塙で囲むなどの方法によって、中の住民以外の車や人の進入を制限した住宅地。

出典：マイケル・J・サンデル著(林芳紀・伊吹友秀 訳)「完全な人間を目指さなくてもよい理由 ―遺伝子操作とエンハンスメントの倫理―」より抜粋、89～91ページ、

2010年10月13日 初版第一刷発行 株式会社ナカニシヤ出版

【課題】上の文章において、「被贈与性を気にかけることの人間社会への貢献」について、著者はどのように考えているとあなたは思うかを、本文中の言葉を用いてまとめて説明した上で、その著者の考えに関して、あなたの考えを741字以上800字以内で論述しなさい。